

## スポーツ動機づけの異文化間研究に向けて

### Toward Cross-Cultural Research on Sport Motivation

西田 保\*  
杉山 佳生\*\*\*\*

磯貝 浩久\*\*  
伊藤 豊彦\*\*\*\*\*

北村 勝朗\*\*\*

Tamotsu NISHIDA\*  
Yoshio SUGIYAMA\*\*\*\*

Hirohisa ISOGAI\*\*  
Toyohiko ITO\*\*\*\*\*

Katsuro KITAMURA\*\*\*

Culture is an important theme in a number of fields in sport psychology. One such area is sport motivation. This paper focuses on sport motivation, a field in which culture plays a particularly influential role. The authors clarify cultural differences and identify distinguishing Japanese features related to goal orientation and causal attribution, process of athletic ability acquisition, and life skills education. Based on these findings, an exploratory model or effective strategies for sport motivation are proposed. The authors also discuss ways to promote cross-cultural research in this field and future directions.

#### はじめに

スポーツ心理学が扱うテーマの中には、文化的な影響を無視できないものがある。例えば、人の行動の原動力となる概念である「動機づけ」は、文化によって多少異なって捉えられることがあり、それらに基づく行動においても文化的な差異がみられている。

実際のスポーツ場面に目を向けてみた場合、トップアスリートの高いそして持続性のある動機づけは、何によってもたらされているのであろうか。

選手のインタビューや会話を新聞記事などで調べてみると、「1番高い所に立てて、皆さんに感謝しています(オリンピック金メダリスト)」、「コーチに迷惑をかけないように頑張った(オリンピック金メダリスト)」、「僕は自分のために戦うという気力はない。一人だったら○○○なんかやらなくてもいい。僕は人のために闘いたい。家族のために(オリンピック金メダリスト)」、「多くの人の

の支えがあって頑張ることができた(大活躍した野球投手)」、「親孝行したい、家族のために(ドラフト1位野球選手)」、「家族のために頑張った(世界大会金メダリスト)」などがあげられた。これらの言葉は、トップアスリートが多くの人に支えられている事実と、これらの人の恩に報いるために努力していることを示している。「家族のため」「お世話になった人のため」「恩返しのため」といった会話は、個人の有能さを重視する個人主義社会とは異なり、集団の和を美德とする集団主義社会で培われた日本人に特有のものかも知れない。

一方、これまでの動機づけ研究に目を移してみても、文化的な差異や文化の影響を考慮する必要性を指摘する事柄が散見される。

例えば、動機づけの概念や理論(期待・価値理論、達成目標理論、自己決定理論など)は、欧米の研究者が中心となって構築されたものであり、文化的背景の異なる日本人に直接適用可能かどうか不明である。

- 
- \* 名古屋大学総合保健体育科学センター
  - \*\* 九州工業大学大学院情報工学研究院
  - \*\*\* 東北大学大学院教育情報学研究所・教育部
  - \*\*\*\* 九州大学健康科学センター
  - \*\*\*\*\* 島根大学教育学部
  - \* Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University
  - \*\* Faculty of Computer Science and Systems Engineering, Kyushu Institute of Technology
  - \*\*\* Graduate School of Educational Informatics, Tohoku University
  - \*\*\*\* Institute of Health Science, Kyushu University
  - \*\*\*\*\* Faculty of Education, Shimane University

達成動機概念においても、個人志向的な達成動機づけと社会志向的な達成動機づけに区別されることがあり、日本人の特徴に言及して「親和的達成動機」と「非親和的達成動機」に分類している研究者（土井，1982）もいる。また、アメリカでは達成動機と親和動機との間には負の相関があるとされているが、日本では正の相関が報告されている（宮本，1975）。

達成目標理論や動機づけ雰囲気の研究においては、欧米では課題志向性と自我志向性はそれぞれ独立した関係にあるとされているのに対して（Duda，1989）、日本では正の相関が報告されている（細田・杉原，1999）。日本人の場合には、両方の志向性を同時に持つ可能性が指摘される。

原因帰属の研究では、北山ら（1995）によると、欧米では、成功を内的要因（特に能力）に帰属して、自分の能力をより高く評価しようとする自己高揚の傾向が認められるという。これに対して、日本人を対象とした場合には、失敗を能力や努力不足に帰属する自己批判的あるいは自己卑下的な傾向がみられると報告している。日本人は自己批判的であり、自分自身の欠陥を改善するように動機づけられているのかも知れない。

また、それ自体退屈な課題であっても、人から与えられたことを黙って受け取り勤勉に行く傾向である「受容的勤勉性」は、日本の子どもの特徴であると指摘している研究（東，1994）や、小学生を対象とした選択課題において、アングロサクソン系アメリカ人は自分の選択した課題に、アジア系アメリカ人は母親が選択した課題に最も動機づけられるという報告もみられている（Iyengar & Lepper，1999）。

体育における学習意欲の強さを、日本、米国、英国、カナダといった4か国の子どもを対象に比較検討した研究（Nishida，1991）においては、欧米の子どもの方が日本の子どもよりも学習意欲の高い傾向が認められた。これには、個人の有能さを主張する欧米を中心とした個人主義と、集団の和を強めることで生産性を高める日本の集団主義あるいは親和動機の強さが影響していたのではないかと推察される。

この他にも、スポーツ選手の技能が向上していく熟達化過程やスポーツを通じたライフスキル教育などに関連する動機づけ要因においても、文化的な特徴や差異がみられている。

以上のことを踏まえた上で、本稿では、文化の影響を受けやすい「スポーツ動機づけ」を取り上げ、「目標志向性と原因帰属」、「スポーツ選手の熟達化過程」、「ライフスキル」といった視点から、①それらの文化的差異を明確にする、②日本人の特徴を明らかにする、③日本の文化を視野に入れたモデルの構築および有効な動機

づけ方略を提言する。そして、これらの論述の後で、スポーツ動機づけの異文化間研究を促進するためのコメントを記述することにしたい。（西田 保）

### 目標志向性と原因帰属の日米比較からみた日本人の特徴

スポーツ動機づけの異文化間研究に関して、初めに異文化間研究の必要性や方法について示し、動機づけに影響を及ぼすと考えられる文化的な要素として文化的自己観を提示したい。そして、目標志向性と原因帰属に関する日米比較の結果を示しながら、今後のスポーツ動機づけ研究に関する提言を試みたい。

スポーツ場面における日本人的な特徴は、古くから報告されてきた。例えば、菅原（1976）は、求道主義、勝利主義、精神主義を指摘している。しかし、これらの特徴は主観的、印象的なものが多く、都合の良いエピソードや歴史を列挙して展開されてきたという意味で、認識の誤りではなく方法論的な不適切であると批判されている（多々納，1988）。すなわち、日本人の特徴を明らかにする方法論として、異文化間での比較が重要となる。

異文化間の比較に関する学問領域として、異文化間心理学がある。異文化間心理学は、2つ、またはそれ以上の互いに異なる文化にまたがって行われる、行動や心理的諸過程の研究の総称と体系であり、心理学的法則の普遍性・一般性を検証すること、異文化間で従属変数と独立変数の関係を明らかにすることなどを目的とする（Triandis，1980）。民族誌的方法、自然観察法、面接調査法、質問紙法などの方法が用いられ、比較においては、研究対象となっている概念や行動の意味や測定方法が等価であるかといった等価性の確認が重要とされる。スポーツ心理学における異文化間研究のレビュー（磯貝，1996）では、殆どの研究で質問紙法を用いているが等価性の確認が不十分であること、なぜ文化的差異が生じるのかに関する説明が十分なされていないことが指摘されている。

スポーツ動機づけと文化に関しては、スポーツの価値や意味づけは所属する文化によって異なるため動機づけに文化的差異がみられることや、動機づけ理論の多くは欧米で発展しているため、他の文化に適用できるか検討する必要があることが指摘されている（Duda & Alison，1990）。この指摘を契機に異文化間研究が増加したが、その多くは欧米で開発された尺度が他の文化に適用できるかといった研究であり、スポーツ動機づけと文化の関係を探求するためには、動機づけに関係する文化要素に着目して検討する必要性が指摘されている（Isogai et al.，2001）。

文化についてみると、文化は「社会の歴史を通じて築かれ蓄えられた慣習、および公の意味構造として捉えられ、慣習や公的な意味構造から成り立つ日常的現実のなかに生きることにより、心のプロセスが形成され、さらに心的プロセスが文化そのものを維持・変容させる（柏木ら、1977）。」と定義されている。すなわち、文化と心は歴史的循環の中で相互に影響しあうとみなされ、自己に対する理解の仕方は、文化的文脈の影響を受けているととらえることができる。日本と欧米の自己についてみると、ベネディクト（1974）は恥の文化と罪の文化を指摘し、浜口（1982）は個人主義と間人主義、土居（1971）は甘えの構造を取り上げている。これらの主要な主張は、欧米の自律的な自己と日本の状況依存的な自己として、対置的にとらえることができる。このような主張を汲みながら、文化的自己観という概念が提示されてきた。文化的自己観は、ある文化において歴史的に形成され、社会的に共有された自己、あるいはひと一般についてのモデル、通念、メタセオリーとしての自己と定義される（北山・唐沢、1995）。そして、欧米文化では「相互独立的自己観」のモデルが優勢であり、日本などの東洋文化では「相互協調的自己観」のモデルが優勢であるとみなされる。

相互独立的自己観が優勢な欧米での自己は、他の人々や周りの事柄とは区別され、切り離された実体とみなされる。自己は周囲の文脈とは独立に存在し、その主体の持つさまざまな属性によって定義される。そして、人々は自己実現や自己目標の達成に向けて動機づけられる。一方、相互協調的自己観が優勢な日本では、人間関係そのもの、あるいはそこにある関係のなかの自分の属性が自己の中心的定義となる。人の目標は、自己がその一部となる価値ある社会関係を見だし、自分自身をその重要な一部として認識し、また周囲からもそのように認識されることである。したがって、他者の意図や社会的な役割といった関係のなかから目標とすべき自己を見だし、それを目標とした自己実現を試みようとする動機づけられる。

このような文化的自己観の違いに着目して、Isogaiら（2003）は、目標志向性と原因帰属に関する日米比較を行った。調査対象は、日本人大学生競技者、374名（男性258、女性116）、米国人大学生競技者、216名（男性124、女性92）であった。調査内容は、スポーツにおける個人・社会志向性尺度（磯貝ら、2000）、スポーツにおける課題・自我志向性尺度（Duda and Nicholls, 1992）、スポーツにおける帰属様式尺度（Hanrahan et al., 1989）、属性（性、年齢、競技レベル、競技種目等）であった。調査は、訳し戻し法を用い、インフォームドコンセントを得て実施された。分析は、多変量共分散分析、因子分

析、相関係数、 $\alpha$ 係数などであった。

主要な結果として、課題・自我志向性の分析では日本人競技者のスポーツでの達成や成功の判断は、個人の上達と他者との比較を統合して行う傾向にあり、米国人競技者は、達成や成功を個人の上達と他者比較の2つの基準で明確に区別していることが示された。また、日本人は米国人より、勝利やライバルに勝つなどの他者比較を重視した達成を重視し、技術の向上などの練習過程を軽視する傾向にあった。

個人・社会志向性の結果では、日本人はスポーツ集団への適応と個性の発揮などの内的適応を統合して行っており、米国人は外的適応と内的適応を明確に区別していることが示された。また、日本人は個性の発揮などの内的基準を重視し、米国人はスポーツ集団への適応を重視する傾向にあった。この結果は、日本人はスポーツ集団を重視し、米国人は個人を重視するという従来の通説とは反対であった。

原因帰属の特徴として、日本人は試合に勝つなどの成功の原因を指導者やチームメートなど自分以外のものに求め、試合中のミスなどの失敗の原因については、自分自身にあるとみなす傾向にあった。反対に、米国人は成功の原因を運動能力など自分自身に求め、失敗の原因を対戦相手など自分以外のものに帰属させる傾向にあった。すなわち、米国人は原因を自己の有利な方向で解釈し、自尊感情を高揚しようとする自己高揚帰属であり、日本人は成功を外的要因、失敗を内的要因に帰属させ自己の価値を減じるような自己批判帰属がみられた。このような原因帰属の相違を文化的自己観からみると、米国人のポジティブな自己像は、自己の資質を表現することやユニークであることなどによって得られるため、自己の有利な方向へ偏って帰属する傾向が強まる。一方、日本人のポジティブな自己像は、他者との協調を維持することなどによって得られ、他者との感情的な結びつきを重視するため、原因を自己批判的な方向に偏って解釈する傾向が強まると解釈することができる。このような日米の相違を踏まえて、今後のスポーツ動機づけ研究及び実践についてのいくつかの提言を試みたい。

第一に、目標志向性に関する結果では、日本人の自我志向性が課題志向性より高いことが示された。また、他の異文化間研究でも日本人の勝利志向性が高いことが指摘されていることなどを考えあわせると、日本人はライバルの存在でやる気が出るといったように、他者比較を基にした動機づけが行われやすいとみなされる。そのため、目標理論や内発的動機づけ理論などで従来は低く位置づけられていた、自我志向性や他者からの動機づけに再注目していく必要があるように思われる。また、日本では課題・自我志向性、個人・社会志向性を統合して

いることから、これらと行動や適応などとの関係は欧米とは異なると考えられる。そのため、今後の動機づけ研究では志向性の役割を十分吟味する必要があると思われる。また、スポーツ指導においては、両志向性をバランスよく高めることが重要になると考えられる。

第二に、他者や集団の役割に注目する重要性を指摘したい。日米比較から、日本人の特徴として、他者のおかげや皆に感謝といった帰属をする傾向や、他者より優れる、監督のために優勝するといった目標を重視する傾向が指摘できる。また、他の動機づけ理論でも、達成動機に及ぼす親和動機の重要性、行動計画理論における規範信念（他者期待）の重要性、他者志向的動機への注目などがみられている。これらのことは、スポーツ動機づけに他者や集団が大きく影響していることを示している。そのため、今後の研究では他者や集団の役割を重視して研究を進めて行く必要があると思われる。

最後に、今後のスポーツ動機づけ研究では、欧米で得られた動機づけ研究の成果が、必ずしも日本人に適用されないという視点を持ちながら研究することが重要である。すなわち、欧米の理論やモデルを援用しつつも、他者との関係や社会的役割を自己に取り入れていると考えられる日本人に、より適合したモデルを構築する必要がある。その際のキー概念になるのは、相互協調的自己や他者との関係性だと思われる。（磯貝浩久）

#### 日本、中国、韓国、ブラジルのスポーツ選手の熟達化過程の比較からみる動機づけの特徴

スポーツ選手が日々の練習や試合に取り組む中で競技力が向上していく過程、すなわち熟達化過程は、長期に渡って自他を取り巻く環境との相互作用によって成り立つ心理的プロセスであるが故に、そうした熟達化過程における動機づけの有り様と、動機づけに及ぼす文化・社会的文脈は、選手のパフォーマンスに大きな影響を与えることになる。そこで、スポーツ選手の熟達化過程の視点から、日本、中国、韓国、ブラジルのスポーツ選手の体験を取り上げ、それぞれの選手の体験の事実を比較検討することにより、スポーツ動機づけにおける文化的差異について考察を行う。

熟達者 (expert) とは、「ある領域での長期の経験を積むことによって多くの知識・技能を獲得し、その領域での課題について非常に優れた問題解決ができるようになった者」(大浦, 2002) と定義づけられる。こうした熟達者に至るまでの過程が、一般的に熟達化 (expertise) と捉えられている。この熟達化は、「当該領域の意図的な練習活動を10年以上に渡って継続することにより達成される」(Simon & Chase, 1973) とする、いわゆる10年ル

ルや、「スポーツ競技の技能レベルは1万時間以上にわたる注意深く組み立てられた練習 (deliberate practice) の合計時間によって示される」(Ericsson & Charness, 1994; Ericsson & Lehmann, 1996) とする1万時間ルールに示されるように、卓越した技能の獲得に至るまでには長い年月と厳しい練習の過程を要するものである。それゆえ、熟達化過程全般にわたり、動機づけは様々な形で選手の競技生活全体に影響を与えている。こうした熟達化過程における動機づけは、大浦 (2002) が「熟達の多くは社会・文化的文脈の中で達成され、ある種の熟達は文化的に価値づけられ、そのための実践が文化的に組織化されている。熟達はすぐれて社会・文化的な達成といえる」と指摘するように、個人の努力という「孤独な作業の連続」のみならず、「たくさんの人々と文化に支えられて」いる。では、スポーツの熟達化過程における動機づけにはどのような文化的な差異が存在するのだろうか。これに関しては、Kitamura & Salmela (1998)、北村 (1999, 2002) においても紹介されているが、ここでは、中国、韓国、ブラジルおよび日本のエキスパート選手の日常の行動や思考様式について質的分析を通して考察し、日本人に特徴的な動機づけについて検討することにする。

対象者は、中国元代表選手4名 (卓球4名)、韓国元代表選手2名 (卓球1名、サッカー1名)、日本元代表選手5名 (サッカー1名、水泳1名、ラケットボール1名、フィギュアスケート2名)、ブラジル現プロフェッショナルサッカー選手8名および指導者8名 (U15、U17、U19、プロBチームより各2名ずつ) の合計27名である。対象者の平均年齢は38.4歳、平均競技歴は16.7年であった。

データ収集は、対象者の指定する練習会場あるいは試合会場において、半構造的 (semi-structured)、自由回答的 (open-ended)、深層的 (in-depth) インタビューにより筆者が直接行った。またインタビュー前後に練習あるいは試合場面の行動観察を行うと同時に、練習中にグラウンドや更衣室等においてインフォーマルな短時間のインタビュー (on-site interview) も実施した。必要に応じてインタビュー後に通訳者による説明を得た後、後日、フォローアップ・インタビューを実施した。テキスト化されたデータは、Côtéら (1993) による質的データ分析法に基づき、熟達化過程における体験について語られた内容を熟達化段階ごとにまとめられた。熟達化段階は、Bloom (1985) による熟達化の3段階に基づき、導入期、専門期、および発展期の3つの段階に区分し、それぞれの段階にそった体験内容をまとめていった。

まず、導入期は当該スポーツ活動やその他のスポーツ活動に初めて触れる体験を通して、身体活動そのものの魅力や身体活動を通して得られる様々な快体験を蓄積

する段階と捉えられている (Côté & Hay, 2002)。本研究の全対象者がそうした快感情について自身の体験の中で触れているが、その中でも文化的な差異は認められる。例えば中国および韓国選手においては、「一生懸命努力することが美德と考えられるような社会の雰囲気」を常に感じていた」といった発話に端的に示されるように、社会的倫理観の潜在的影響を受けた意識構造が導入期における動機づけを形成している点が特徴としてあげられる。また、ブラジル人選手に関しては、「いろいろなことができるようになったり、サッカーがうまくなっていくのがうれしかった」といった発話に示される、当該スポーツの上達や自分自身の変化に対する認知が動機づけに影響を与えている点があげられる。日本選手においては、「親が見ている安心感」といった、親、兄弟、友人等近い人々との関わりの意味づけが導入期の動機づけ形成に大きな影響を与えている点があげられる。

次に、専門期は当該スポーツ活動の専門的な練習活動を中軸にすえ、技能獲得を意図した反復練習を蓄積していく段階と捉えられている (Côté & Hay, 2002)。中国・韓国選手においては、「遊びでなく仕事」「チームのために」といった社会的関係の中にある暗黙の期待や価値観と自身のもつ専門的能力を比較する中で自らの欠けている点を認識し、更なる努力に専心することが動機づけの重要な要素となっている。ブラジル選手の場合、専門期においては自ら目標を設定し、それに自己を駆り立て、その目標を達成することを志向する形で動機づけられている点が特徴としてあげられる。一方、日本選手においても、専門期においては自身のパフォーマンス向上を目的とした意図的な反復練習への専心が多く語られている。その中で日本人選手の特徴としては、「メニューを通してコーチと会話している感覚ですね」といった発話に示されるように、意味ある人間関係を見出すことによって得られる他者からの期待や評価が練習活動への専心において重要な要素となっている点があげられる。

最後に、発展期は選手の競技力が高いレベルで向上・維持されていく期として位置づけられ、そこではより質の高い練習の構築や、自己モニタリングによる競技能力の探索的向上が果たされていく段階として位置づけられている (Côté & Hay, 2002)。この期における中国・韓国選手の特徴として、「責任の重大さを感じ、強い選手にならなければ」「選ばれたことへの感謝の気持ちと責任感」といった自己モニタリングによる役割受容的な自己認知が強くなされている点があげられる。ブラジル選手においては、「レギュラーに選ばれなかったのは予想外」「相手や状況によって狂わされる」といった発話に示されるように、自己モニタリングの特徴が、成功に対

する高い自己評価と、失敗に対する外的要因への帰属といった点にみてとることができる。日本人選手は、「まわりが皆ベテランの選手」「期待に応えられないときは辛い」「自分の力不足を痛感」といった発話に示されるように、目標とする結果やパフォーマンスに到達しない状態に対してなされる自身の未熟さといった内的不安定な原因帰属とそれを克服しようとする努力への専心によって動機づけられる点が特徴としてあげられる。

以上のような、中国、韓国、ブラジルおよび日本選手の体験の分析から明らかにされた日本人選手の動機づけの特徴について、ここでもう一度整理しておきたい。まず、当該スポーツ活動あるいはその他のスポーツ活動に初めて触れる体験を通して、身体活動そのものの魅力や身体活動を通して得られる様々な快体験を蓄積する段階である導入期においては、他者とのつながりを重視する動機づけが重要な意味を持っている点があげられる。すなわち、守られている、認められている、共感されている、安心感がつくりだされていることが、この期の日本人の動機づけにおける重要な要因としてとらえることができた。また、当該スポーツ活動の専門的な練習活動を中軸にすえ、技能獲得を意図した反復練習を蓄積していく段階である専門期においては、意味づけした社会的関係の中での「相互の関係性」が意識される動機づけが重要な意味を持っている点があげられる。すなわち、自身に向けられる期待の認知、期待に応える自己像、および努力への原因帰属といったことが、この期の日本人の動機づけにおける重要な要因として捉えることができた。更に、選手の競技力が高いレベルで向上・維持されていく段階である発展期においては、他者の期待の中での「～らしさ」に見合う自己実現を重視する動機づけが重要な意味を持っていた。

こうした導入期、専門期および発展期の各期を通じて共通する日本人のスポーツ動機づけの特徴として、選手にとっての自己とは、自身を取り巻く人や事柄と結びついた関係志向的な実体となっている点があげられる。換言すれば、指導者や家族等の期待に対する自らの不足の認知が動機づけを形成する一要因となっている。そのため、具体的な社会的状況に応じて定義される特性としての「～らしさ」あるいは他者からの認知が自己定義の中心となっている。

こうした特徴を持つ日本人の動機づけに対し、今後どのようなアプローチが可能か、いくつかの提言を試みたい。

第一に、導入期においては、他者とのつながりを重視する動機づけ方略が有効であると考えられるため、親子、兄弟、友人といった近い関係である人と共有する楽しさの体験や、新奇性に富み、称賛が繰り返される

体験を多く蓄積することで動機づけを高めていくことが重要であると考えられる。そうした体験により、自分が守られている、認められている、共感されている、といった実感をもつことにより安心感がつくり出されていく。

第二に、専門期においては、意味づけした社会的関係の中での「～らしさ」を明確に意識していく動機づけ方略が重要であると考えられる。すなわち、自身に向けられる期待の認知、期待に応える自己像の育成、および努力への原因帰属といった、有能感の育成や期待提示により動機づけを高めることが、この期の動機づけにおいて重要な意味をもつと考えられる。ここで重要な点は、関係性の中で有能感を育成する際、導入期における共感や楽しみの体験の蓄積が前提となることであり、また過度に関係志向的な動機づけを重視することで逆に選手の動機づけの低下や抑制を引き起こさないような方策が求められる点である。

第三に、発展期においては、他者の期待に見合う自己実現を重視する動機づけ方略が有効であると考えられる。そこでは、自己批判、すなわち自己モニタリングにより期待への不足分を努力で補うような動機づけが重要な意味をもっている。ただし、他者志向的な動機づけについても、それを過度に重視するあまり選手の自律性や主体性を阻害し、自己決定の欲求に対する抑圧とならないよう、導入期から専門期、そして発展期に至る一連の熟達化過程の中で動機づけ方略を考えることが重要となる。

第四に、前述した他者志向や関係性重視による課題や、導入期、専門期、および発展期のスムーズな移行といった問題を解決する上で、いかに練習の質を高めつつ阻害要因を除去し専心性を高めていくかについての配慮が重要な意味を持つと考えられる。そのために、導入期から発展期までの間の、注意深く組み立てられた活動 (deliberate play) と、注意深く組み立てられた練習 (deliberate practice) とのバランスを保つことが必要である。この注意深く組み立てられた活動 (deliberate play) は、活動主体が、喜んで参加する活動で、本来的に楽しく、楽しむことを目的とするスポーツ的な活動であり、即座の満足感が得られ、内発的に動機づけられているような活動である。ただし、単なる遊びとは異なり、スポーツ競技に類似したルールが存在し、そうしたルールが自分たちのレベルに合った形でアレンジされている活動である。こうした活動を中心とし、親密な他者との深い関わりが展開されることが導入期におけるスポーツ動機づけの重要な役割を果たすと考えられる。また、注意深く組み立てられた練習 (deliberate practice) とは、努力を要するもので、本来的に楽しみを伴わない練習活

動であり、現在のパフォーマンス向上のみを目的とする意図的な反復練習である。熟達度が高まるにつれ、徐々にこうした練習活動へと移行していくことで、専門期および発展期における動機づけを維持し、高めていくことが可能となると考えられる。(北村勝朗)

### 日本におけるスポーツを通じた ライフスキル教育のあり方

スポーツ動機づけの文化差問題を検証しようとする際、青少年の人間の教育を意図して行われているようなスポーツ関連活動に言及することも、1つのアプローチの仕方であると考えられる。そこで、ここでは、「スポーツを通じたライフスキル教育」を取り上げて、スポーツ動機づけについての文化的考察を試みることにする。

ここ20年来、米国では、青少年に対する、スポーツを介して行われるライフスキル教育への関心が高まり、また、実際に多くのプログラムが作成され、実践されてきている (Danishら, 2002; 杉山, 2004を参照)。このような動向に対しては、日本のスポーツ心理学関係者も注目し始めており、国内でも、実証研究や実践報告が散見されるようになってきた (例えば、島本・石井, 2007; 上野, 2007)。

ところで、このような、主として米国で発展してきた、スポーツを通じたライフスキル教育プログラムを、他の国においても有効なものとするためには、その国や地域の文化・社会的な特徴を踏まえた改良を施したり、独自のものを開発することが期待される。実際、ニュージーランドでは、先住民族であるマオリ族のためのプログラム「Hokowhiti Program」が作られている (Danishら, 2004)。このような工夫の必要性は、日本人を対象としたプログラムを構築しようとする際にも当てはまると思われる。プログラム自体の効果のみならず、プログラムへの参加動機を高めるためにも、日本人あるいは日本文化にふさわしい内容を模索することが重要であると考えられる。

それでは、日本人あるいは日本文化に適したプログラムを作るためには、どのような点を考慮する必要があるのだろうか。ここでは、わが国において実際に行われていた1つのライフスキル教育プログラムを事例とし、この問題を検討することにする。

言及するプログラムは、米国に本校を持つ民間ゴルフスクールが、日本国内で行ったライフスキル教育プログラムである。主たる目的は、小中学生を対象に、ゴルフスキルとライフスキルを教えるというものであった。レッスンは、通常、週1回、2時間実施され、1コースは、合計10回のレッスンで構成されていた。2時間の

レッスンの内訳は、20分間のライフスキルレッスン、1時間のゴルフスキルレッスン、および30分程度の奉仕活動（ゴルフ練習場のボール拾いや片付け）となっており、約半分の時間が、ゴルフの練習以外の活動に割かれていた。

この中のライフスキルレッスンでは、9種類のライフスキル行動（「自己紹介をする」、「自分や相手、状況に敬意を示す」など）を、さまざまな実践練習を通して学習することが目標とされていたが、このプログラム内容を定める際に、日本人に適したプログラムとするためにどうすればよいのかが検討された。具体的には、米国在住の日本人であるスクールのディレクターが、主観的ではあるが以下のような理解に基づき、日本人のためのプログラムを提案した。

- ・日本の青少年に不足しがちであると考えられる側面
  - (1) 個の確立、自律性
  - (2) 自信、主張性、挑戦性
  - (3) 自分に与えられたもの（ギフト）に対する理解
- ・日本人あるいは日本文化の中で重要視される側面
  - (1) 目上の人あるいは年長者に対する敬意
  - (2) 周囲の人たちとの関係性
  - (3) 謙遜・謙讓 (humility, modesty) や思いやり (compassion) の気持ち

このように、日本人の特徴を踏まえてプログラムを構成した上で、ライフスキルレッスンは実施されていた。プログラムの内容の詳細については、杉山ら (2007a, 2007b) などで紹介されているが、このような実践活動を継続していく中で、スポーツを通したライフスキル教育に対する日本人の動機づけを高めるために解決しなければならない課題もまた、顕在化してきた。そこで、以降では、その課題のいくつかを提示するとともに、その対応策を提案することにしたい。

まずは、教育すべきスキルの選定の問題があげられる。ある特定の文化の中でライフスキル教育を行うためには、その文化になじんでいるスキル要素に高い価値を付与するとともに、それらの教育に重点を置くことが重要であると考えられる。相川 (2000) は、ライフスキルの重要要素である社会的スキルに対する評価には、多くの場合、文化的基準や判断が関わっており、そのスキルが状況にふさわしいものであるのか（適切性）、あるいは、そのスキルが役に立つのか（効果性）といったことは、文化によって規定されていて、相対的なものであると指摘している。したがって、より有効なライフスキル教育を行うためには、当該文化圏における「適切性」や「効果性」が高いスキルを、学習対象として選択する必要があるだろう。例えば、スポーツではあまり重視されない傾向のある「謙虚さ」や「思いやり」に関わるスキ

ル、あるいは「人あたりの良さ」（堀毛, 1994）のようなスキルの教育を、わが国においては、積極的に取り入れていくのがよいのかも知れない。

また、保護者や周囲の関係者との結びつきの強さも考慮する必要があると思われる。特に、日本においては、ゴルフスクールへの参加を希望する青少年の保護者の中に、ゴルフの世界で成功する（例えば、プロになる）ことを強く期待している者が、比較的多く含まれているようである。そのため、人間の成長を促すライフスキル教育を謳っているプログラムに対しても、関係者の要求は、「競技力」の向上であるという場合も少なくない。このような現状を踏まえると、周辺関係者の意識や態度の変容をも意図したプログラムの導入が必要不可欠であるだろう。周辺関係者が、ライフスキルの向上に高い意義を見出していなければ、青少年のライフスキル教育プログラムへの動機づけも、十分なものはならないだろう。

さらに、スポーツでは、上達や競争が強調されるのが一般的であるが、他者との関係性や「人あたりの良さ」などが重視される日本的文化の中では、協調・協力的行動に関わるスキルを身につけることが、強く期待されていると考えられる。したがって、スポーツを通したライフスキル教育においては、このような協調・協力的行動が評価されるような環境づくりや雰囲気づくりが重要であると思われる。例えば、協力的な行動に対しては、それが仮にスポーツパフォーマンスの低下をもたらしたとしても、大きな称賛を与えることが必要であるのかも知れない。このように、個人的な達成よりも、協調・協力などの社会的行動が高く評価されるような動機づけ雰囲気、すなわち、「社会的目標を志向する動機づけ雰囲気」を、スポーツ活動の場であえて作り出すことが、日本文化にふさわしいプログラムへとつながるのではないかと推察される。

以上、わが国における、スポーツを通したライフスキル教育プログラムへの動機づけを高めるための方策について、実践活動経験を踏まえて導き出されたいくつかの試案を提示したが、ライフスキル学習への動機づけプロセスについては、これまでに理論的モデルのようなものも示されておらず、未だ不明な点が多いといわざるを得ないのが現状である。文化的な影響が多であることは否定しえないところであるが、スポーツそれ自体への動機づけと同様に捉えることができるものであるのかといったような点も含めて、今後、さらに理論的、実証的に検討を進めていく必要があると考えられる。

(杉山佳生)

## 異文化間研究に向けてのコメント

スポーツにおけるこれまでの動機づけ研究は、動機づけをその質や量といった個人内変数として扱ってきた。しかしながら、スポーツ活動が監督や教師の指導のもと、地域やチームといった社会的な相互作用の中で営まれていることを考えると、個人を取り巻く社会文脈的な要因は、スポーツにおける動機づけに重要な影響を及ぼしていると考えられる。以下、本シンポジウムで取り上げられた文化は選手を取り巻く社会文脈的要因に影響を与え、さらに選手個人の動機づけに影響するという観点から、若干のコメントをさせていただきたい。

磯貝氏は、目標志向性と原因帰属における日米比較のデータをもとに、日本人の特徴について触れられた。まず、「従来の動機づけ理論が欧米で発展してきたものであり、他の文化での適用可能性の検討が必要である」と主張されたが、全くその通りであると思う。例えば、最近注目を集めている達成目標理論においても、課題目標と成績目標の2つが取り上げられていることが多いが、Wentzel (1999) が指摘するように、親和や承認といった社会的目標も動機づけに重要な影響を与えていると考えられる。氏が日本人の特徴として指摘された、相互協調的自己・他者との関係性・他者志向的動機の重要性を考慮すると、例えば、社会的目標を含む多様な達成目標を取り入れたモデルを設定し、それらが動機づけに及ぼす影響を検討することが日本人に合った動機づけ方略が明らかにする上で必要とされよう。

次に、北村氏は、日本、中国、韓国、ブラジルのスポーツ選手の熟達過程の比較から日本人の動機づけについて話題提供された。導入期・専門期・発展期の熟達化に至る3つの段階ごとに比較された動機づけの特徴は示唆に富む提言であり、特に同じアジアでありながら、社会的倫理観や役割受容が重要な役割を果たす中国・韓国と「関係性」をキーワードとする日本との相違は、記憶に新しい北京オリンピックにおける結果の違いとなって表れているのかもしれない。ただ、動機づけ方略として捉えた場合、他者志向的な動機づけにせよ関係志向的な動機づけにせよ、それらを強調することでかえって選手の熟達化を抑制するといった側面は認められないのであろうか。熟達化の過程において、他者を志向する動機づけがどのように内面化されていくのか、内発的動機づけにおける有能さや自己決定への欲求とどのように統合されていくのかについて検討していく必要がある。その際、今回発表の対象とならなかった欧米の選手の熟達化についても是非検討していただきたい。

最後に、杉山氏は、スポーツを通したライフスキル学

習に対する動機づけについて話題提供された。ライフスキルに関わって、謙譲や謙遜、思いやりを重視する一方、個の確立や自律性、自信、主張性が不足するという日本人の特徴についての指摘は、磯貝氏や北村氏の指摘とも重なって、興味深い。とりわけ、社会的スキルの「適切性」と「効果性」は文化に規定されており相対的なものであるという指摘は、動機づけ研究においても示唆に富むものであった。また、日本人のライフスキル教育を進めるにあたって提言された「社会的目標を志向する雰囲気づくり」は、ライフスキルの獲得を促すことを通してスポーツの社会的な価値を高めるものであると同時に、スポーツそのものへの動機づけにおいても有効な視点であると思われる。

さて、これまで社会文脈的要因は、例えば、学級集団の風土(根本, 1989)といった観点から取り上げられてきたが、動機づけ研究においては、それらがモデルに組み入れられ、その影響が検討されることが少なかったように思われる。しかし、最近になって、内発的動機づけ研究では、それまでの有能さと自己決定に加え、関係性への欲求が基本的欲求として取り上げられるようになってきている(Deci & Ryan, 2002)。また、達成目標理論においても、動機づけ雰囲気など、チームやクラス全体の目標志向性ととともに、社会的目標といった多様な目標も注目されるようになってきている(例えば、中谷, 2007)。これらは、直接「文化」を扱っているものではないが、文化が重要な影響を及ぼしていると考えられる社会文脈的要因を動機づけにおいても重視する流れにあることが窺える。事実、動機づけ研究において、これら社会的要因を組み入れたモデルの検討が行われており(例えば、Ntoumanis, 2001; Standage, Duda, & Ntoumanis, 2003)、スポーツにおける動機づけ方略の検討に有益な情報が得られるものと期待される。したがって、今後、スポーツの動機づけに関わる社会文脈的要因を明らかにし、それらの影響の濃淡を比較・検討していくことが、動機づけ方略をより明確にする上で必要とされよう。その際、北村氏が指摘した熟達化を段階別に検討するという指摘は、動機づけを検討する上でも有効な視点であると思われる。さらに、スポーツにおける社会文脈的要因に影響する文化そのものの変容という視点も動機づけの検討に考慮すべきであろう。(伊藤豊彦)

## 引用文献

- 相川 充 (2000) 人づきあいの技術—社会的スキルの心理学—。サイエンス社。  
東 洋 (1994) 日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて。東京大学出版会。



- ベネディクト R. 長谷川松治訳 (1974) 定説菊と刀—日本文化の型—。社会思想社。
- Bloom, B. S. (1985) *Developing talent in young people*. New York: Ballantine.
- Côté, J., & Hay, J. (2002) Children's involvement in sport: A developmental perspective. In Silva, J. M., & Stevens, D. E. (Eds.). *Psychological foundations of sport*. Allyn & Bacon: Boston, MA, pp.484–502.
- Côté, J., Salmela, J. H., Abderrahim, B., & Russell, S. J. (1993) Organizing and interpreting unstructured qualitative data, *The Sport Psychologist*, 7, 127–137.
- Danish, S. J., Fazio, R. J., Nellen, V. C., & Owens, S. S. (2002) Teaching life skills through sport: Community-based programs to enhance adolescent development. In J. L. Van Raalte, & B. W. Brewer (Eds.), *Exploring Sport and Exercise Psychology* (2nd ed.). American Psychological Association: Washington DC, pp.269–288.
- Danish, S. J., Forneris, T., Hodge, K., & Heke, I. (2004) Enhancing youth development through sport. *World Leisure*, 46 (3), 38–49.
- Deci, E. L. & Ryan, R. M (2002) *Handbook of Self-determination Research*, The University of Rochester Press.
- 土井聖陽 (1982) 達成動機の二次元説—親和的達成動機と非親和的達成動機—。心理学研究, 52, 344–350.
- 土居健郎 (1971) 甘えの構造。弘文堂。
- Duda, J. L. (1989) Relationship between task and ego orientation and the perceived purpose of sport among high school athletes. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 11, 318–335.
- Duda, J. L., & Allison, M. T. (1990) Cross-cultural analysis in exercise and sport psychology: A void in the field. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 12, 114–131.
- Duda, J. L. & Nicholls, J. G. (1992) Dimensions of achievement motivation in schoolwork and sport. *Journal of Educational Psychology*, 84, 290–299.
- Ericsson K. A., & Charness, N. (1994) Expert performance: Its structure and acquisition. *American Psychologist*, 49, 725–747.
- Ericsson, K. A., & Lehmann, A. C. (1996) Expert and exceptional performance: Evidence of maximal adaptation to task constraints. *Annual Review of Psychology*, 47, 273–305.
- Hanrahan, S. J., Grove, J. R., & Hattie, J. A. (1989) Development of a questionnaire measure of sport-related attributional style. *International Journal of Sport Psychology*, 20, 114–134.
- 浜口恵俊 (1982) 間人主義の社会日本。東洋経済新報社。
- 堀毛一也 (1994) 人あたりの良さ尺度。菊池章夫・堀毛一也 (編著), 社会的スキルの心理学, 川島書店, pp.168–176.
- 細田朋美・杉原 隆 (1999) 体育の授業における特性としての目標志向性と有能さの認知が動機づけに及ぼす影響。体育学研究, 44, 90–99.
- 磯貝浩久 (1996) スポーツ心理学における異文化間研究の動向と課題。九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学編), 9, 123–134.
- Isogai, H., Brewer, B. W., Cornelius, A. E., Etnier, J., & Tokunaga, M. (2003) A cross-cultural analysis of goal orientation in American and Japanese physical education students. *International Journal of Sport Psychology*, 34, 80–93.
- Isogai, H., Brewer, B. W., Cornelius, A. E., Komiya, S., Tokunaga, M., & Tokushima, S. (2001) Cross-cultural validation of the social physique anxiety scale. *International Journal of Sport Psychology*, 32, 76–87.
- 磯貝浩久・徳永幹雄・橋本公雄 (2000) スポーツにおける個人・社会志向性尺度の作成。スポーツ心理学研究, 27 (2), 22–31.
- Iyengar, S. S., & Lepper, M. R. (1999) Rethinking the value of choice: A cultural perspective on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 349–366.
- 柏木恵子・北山忍・東 洋 (1997) 文化心理学—理論と実証—。東京大学出版会。
- 北村勝朗 (1999) スポーツ選手の「才能」発達における Deliberate Practice 理論の検証: 中国卓球選手の事例をもとに。東北体育学研究, 17 (1), 1–10.
- 北村勝朗 (2002) ブラジル・プロフェッショナル・サッカーコーチを対象としたコーチング行動分析。東北体育学研究, 20 (1), 1–10.
- Kitamura, K., & Salmela, J. H. (1998) Talent development of elite athletes in Asian countries. *Journal of Applied Sport Psychology*, 10, 114.
- 北山忍・唐澤真弓 (1995) 自己: 文化心理学的視座。実験社会心理学研究, 35, 133–163.
- 北山 忍・高木浩人・松本寿弥 (1995) 成功と失敗の帰因: 日本の自己の文化心理学。心理学評論, 38, 247–280.
- 中谷素之 (編著) (2007) 学ぶ意欲を育てる人間関係づくり—動機づけの教育心理学—。金子書房。
- Nishida, T. (1991) Achievement motivation for learning in physical education class: A cross-cultural study in four countries. *Perceptual and Motor Skills*, 72, 1183–1186.
- 根本橋夫 (1989) 学級集団における社会心理学的風土の多次元的研究—問題点と主要な知見—。千葉大学教育学部研究紀要, 37, 39–54.
- Ntoumanis, N. (2001) A self-determination approach to the understanding of motivation in physical education. *British Journal of Educational Psychology*, 71, 225–242.
- 宮本美沙子・加藤千佐子 (1975) 達成動機と親和動機との関係について。日本女子大学紀要, 22号, 23–28.
- 大浦容子 (2002) 熟達化, 波多野諄余夫他編, 教授・学習過程論。日本放送出版協会。69–78.
- 島本好平・石井源信 (2007) 体育授業におけるスポーツ経験が大学生のライフスキルに与える影響。スポーツ心理学研究, 34 (1), 1–11.
- Simon, H. A., & Chase, W. G. (1973) Skill in chess. *American Scientist*, 61, 394–403.
- Standage, M., Duda, J. L., & Ntoumanis, N. (2003) A model of contextual motivation in physical education: Using construct from self-determination and achievement goal theories to predict physical activity intentions. *Journal of Educational Psychology*, 95, 97–110.
- 菅原礼 (1976) 日本のスポーツ風土の社会学的考察。新体育, 46–49.
- 杉山佳生 (2004) スポーツとライフスキル。日本スポーツ心理学会 (編), 最新スポーツ心理学—その軌跡と展望。大修館書店, pp.69–78.
- 杉山佳生・高橋紀子・熊谷和子・林田あつみ・豊原源重 (2007a) ゴルフを通じたライフスキル教育の実践事例。九州スポーツ心理学研究, 19, 62–63.
- 杉山佳生・高橋紀子・熊谷和子・保田豊嗣・林田あつみ・豊

付 記

- 原源重・熊谷秋三 (2007b) ライフスキル教育を組み込んだジュニアゴルフスクールの内容と課題. *ゴルフの科学*, 20 (2), 34-35.
- 多々納秀雄 (1988) スポーツ活動の実態と価値意識に関する国際比較研究 (1) —「日本的スポーツ」論の認識論的・方法論的諸課題—. *健康科学*, 10, 91-101.
- Triandis, H. C. (1980) *Handbook of cross-cultural psychology*, Allyn & Bacon.
- 上野耕平 (2007) 運動部活動への参加を通じたライフスキルに対する信念の形成と時間的展望の獲得. *体育学研究*, 52, 49-60.
- Wentzel, K. R. (1999) Social-motivational processes and interpersonal relationships: Implication for understanding at school, *Journal of Educational Psychology*, 91, 76-97.

本稿は、2008年度日本スポーツ心理学会第35回記念大会 (2008.11.14) において開催された「会員企画シンポジウム (スポーツ動機づけと文化：日本人の特徴とは?)」の内容に基づき作成したものである。

(2008年12月24日受付)